



発行日 2023. 9. 1  
発行 渡辺 真樹  
発行所 一般社団法人  
群馬県理学療法士協会事務局  
群馬県前橋市大渡町 1-10-7  
群馬県公社総合ビル 6F  
源流題字 浅香 満  
編集責任者 榎原 清

# 源流

No. 155

## Contents

■理学療法アラカルト「家族中心のケアについて」 風間大輔	・・・	02
■職場紹介 社会福祉法人清鳳会 児童発支援事務所 笑（えむ）大竹良美	・・・	03
■理学療法士が知っておきたい社会保障制度 浅野翔平	・・・	05
■地域包括ケアシステムって何ですか？ 井上恵美子	・・・	06
■書籍紹介 「循環とは何か？ 虜になる循環の生理学」 徳武大樹	・・・	07
■後輩理学療法士へ 武田廉	・・・	08
■スポーツ推進部より	・・・	09
■第1回スポーツ推進部交流会（東毛・中毛ブロック）	・・・	10
■第37回臨床講習会	・・・	11
■北毛ブロック新卒歓迎交流会	・・・	12
■東毛ブロック新卒歓迎交流会	・・・	12
■西毛ブロック新卒歓迎交流会	・・・	13
■中毛ブロック新卒歓迎交流会	・・・	13
■2023年度介護予防推進リーダー導入研修会	・・・	14
■会員動向	・・・	14
■ニュース收受	・・・	14
■編集後記	・・・	14

# 理学療法アラカルト

## 「家族中心のケアについて」

群馬大学医学部附属病院

風間 大輔



群馬大学医学部附属病院リハビリテーション部所属、理学療法士の風間大輔と申します。小児リハビリテーションに興味があり、2013年に理学療法士となり、現在臨床経験年数は11年目となりました。当院の小児リハビリテーションは「明るく健やかな育ちを支える小児リハビリテーション/急性期から地域福祉への架け橋」というポリシーを掲げ、患児とその家族、院内の小児科医師や看護師、保育士、特別支援学校の教員、また院外の訪問看護ステーションスタッフや通所デイサービス職員、保育士、特別支援学校の教員、相談員さんと、連携し支援にについて考える機会が多くあります。

小児リハビリテーション分野に限らず、様々な分野で患者やその家族、他施設から、または他職種から理学療法士としての意見を求められる機会があるのではないのでしょうか。根拠に基づいた情報を提供することは大事だと思いますが、その情報が誰にでも当てはまる“Best”ではないかもしれません。

今回は“Family - Centered Care(家族中心のケア；FCC)”という考え方を紹介したいと思います。FCCとは、「患者、家族、医療従事者の間で相互に有益なパートナーシップを築き、患者の人生における家族の重要性を認識したうえで、医療の計画、提供、評価を行うアプローチである」<sup>1)</sup>とされます。FCCの基本原則を要約すると、①患者や家族の希望が医療計画に取り込まれる、②ケアの選択は子どもや家族が選択しやすいもの、③偏りのない情報提供で意思決定に家族が参加する、④子どもの発達段階に合わせて公式または非公式の支援情報を提供する、⑤ケア提供のみでなく、プログラムの開発・実施、医療施設の設計や製作などあらゆる段階で患者・家族と協働する、⑥個々の患者や家族の強みを認識し、活かすこと、そして自信をもってその強みを活かすことに参加できるようにすること、とされています。

例えば、家族に合わせた診療プランとして、乳幼児の兄弟がいて通院に時間が割けないが、通院リハビリテーションが必要な児の場合には、家族が協力できる通院頻度を保ち、その間は自宅で可能な体操の指導をしたり、特別支援学校の先生と連携して授業や活動での運動発達の促進へ働きかけることもできるかもしれません。また情報提供によって生活のイメージをする方法として、自宅療養する患者への退院時の補装具などの情報提供において、家族の協力状況や住宅環境を踏まえたうえで、複数の歩行器を選択肢として紹介し、家族とともに決定してもらおうと本人だけではなく家族もイメージしやすいかと思います。

当たり前と感じる方も少なくはないかもしれません。4月から理学療法士として働き始めた方も、臨床業務で活躍している時期だと思います。支援には多職種で話し合い、ケアプランをたてるため、

様々な資格を持つ専門家が意見交換をすると思います。私たちが理学療法士として、患者に携わる際に、機能面だけでなく患者の意思や希望を取り込んだ計画や支援の立案に協力し、そしてわかりやすい支援の選択肢を改めて考えてみてはいかがでしょうか。

引用文献:

1) Committee On Hospital Care and Institute For Patient And Family - Centered Care , 2012 , “Patient - and family - centered care and the pediatrician’ s role” , American Academy of Pediatrics , 129-2:394-404



## 職場紹介

### 社会福祉法人 清鳳会 児童発達支援事業所 笑（えむ）

大竹 良美

当事業所の位置するみどり市笠懸町は、東毛地区の中でも緑豊かでのどかな地域です。

社会福祉法人清鳳会は、昭和 54 年の保育所設立以来長きにわたり地域の保育・福祉ニーズに应运てきました。障がい児福祉の分野では、平成 18 年に市の委託事業として、みどり市初となる心身障害児集団活動・訓練事業「障がい児学童クラブ 陽だまり」を開設しました。平成 29 年に陽だまりが放課後等デイサービスに切り替わると、翌平成 30 年には当法人の母体である「認定こども園みどりのもり」との一貫した保育・療育が可能となるよう、「児童発達支援事業所 笑（以下、笑）」を開設しました。



笑は、身体障がいや発達障がい、知的障がいなどの特性を持つ未就学のお子さんを対象とした療育施設です。1 日定員 10 名と、集団の場でありながらもより細やかな支援が可能になっています。また、診断のついていないお子さんでも医師等により療育の必要性が認められれば障がい者手帳の有無に関わらず利用することができます。当事業所は認定こども園・放デイと併設しているため、



就学前には必要に応じて園と連携しながらの併用が可能で、就学後も一貫した支援が行いやすいのが特徴です。

笑<sup>えび</sup>では、子ども達の自主的な育ちを引き出すため、「遊び」を通して発達の土台を広げることが大切にしています。子ども達は、遊びの中で様々な経験を積み、粗大運動や巧緻動作、コミュニケーション、社会性を獲得していきます。障がいのあるお子さんを前にするとついその基本を忘れ、何かを教えたり練習したりすることに目が行きがちですが、遊

びの中で生まれる「楽しい！やりたい！」という気持ちが発達の基礎であることは、障がいのあるお子さんでも変わりないと感じています。

笑<sup>えび</sup>を利用するお子さんの多くは、身体機能や感覚、認知機能の偏りにより遊びや経験が限局されやすい状況にあります。一人ひとりの躰きに合わせ少しの工夫や手助けをすることで、「できる」ようになることが沢山あります。療育施設でのリハ職の役割は手探りのことが多いですが、日々の中でできるその少しの工夫を保育の専門職と一緒に考え、子どもの変化をタイムリーに捉えていけることが地域の事業所にリハ職が在籍するメリットではないでしょうか。

子ども達の育つ力を最大限引き出すには、日頃子ども達に関わってくださっている医療機関の担当者、保育園・こども園や幼稚園の先生方、そしてご家族との連携がとても大切だと実感しています。それぞれの視点から見た課題を擦り合わせ統一した支援を行えるよう、地域のリハ職同士ももっと気軽に、そしてより密に、連携を取っていく必要があると感じています。

笑<sup>えび</sup>だけでなく、地域にある療育施設がたくさん「できた！」が生まれる場所になるよう、施設や職種の垣根を越え地域一丸となって子ども達を支援していきたいと思えます。



# 理学療法士が知っておきたい社会保障制度

## 「育児休業を取得してみた ～男性の立場から～」

群馬大学医学部附属病院 浅野翔平

13.97%。厚生労働省の「雇用均等基本調査」による、令和3年度の男性育児休業取得率の数字です。令和2年度以前は取得率10%以下であったことから、男性の育児休業取得率は増加傾向にあると言えますが、女性の育児休業取得率は10年以上の期間、80%以上であるのに対し、圧倒的に低水準です。厚生労働省の資料によりますと、男性が育児休業制度を利用しなかった理由は、「収入を減らしたくなかった」という回答が最も多かったようです。

私は昨年に第二子（次男）が生まれ、第一子（長男）出生後は育児休業を取得しなかったのですが、今回は次男出生直後から約1ヶ月の育児休業を取得しました。今回私が育児休業を取得し良かったと感じた点等を、体験談も交えてお伝えできればと思います。

出生後の行政手続きや新生児を自宅に迎え入れる準備、必要物品の買い物等、赤ちゃんが産まれた後は何かと慌ただしいです。しかし、出産を終え身体的にも精神的にも疲弊している女性が、これらの準備を行うことは中々大変であり、男性の協力が必要不可欠です。男性側も働いている中で時間を捻出するのは大変ではあると思いますが、育児休業を取得していればスムーズに対応ができ、実際私も余裕を持ってこれらの手続きや準備を行うことができました。

母子が無事退院し、自宅での生活が始まります。第二子とは言え、新生児の育児は久しぶりであり、慣れるまでには少し時間を要しました。長男出生時は長男の育児にのみ集中できましたが、今度は長男の面倒を見ながら赤ちゃんの世話も行うという慌ただしい生活が待った無しでスタートしました。例えば朝のスケジュールですと、起床したら朝食を作り、長男を食事させ、その間に保育園へ送る準備、洗濯、次男のオムツ替え、着替え、食器の洗い物、準備を終えたら長男を保育園へ送る、といったようにやることは山積みです。仕事においても、マルチタスクを効率的に処理するには慣れや時間も必要です。2人分の育児というマルチタスクを慌てずこなす準備期間としても、育児休業は最適でした。

今回、育児休業を取得して最も良かった点は、家族と過ごす時間がしっかりと取れたことでした。育児に対する不安やパートナーのサポート不足等により、母となった女性は孤独感を感じやすく、産後うつ病のリスクにもなりえます。また、上の子も突然やってきた赤ちゃんへの接し方に戸惑い、自身への注目も少なくなることから「赤ちゃん返り」が始まることもあると言います。そういった点では、育児休業のおかげで妻と育児に関しての喜びや不安を共有できる時間が増え、兄となった長男のメンタルヘルスケアもじっくり行うことができ、家族の絆がより一層深まったと感じています。私にとって育児休業は大きな財産となる期間でした。育児休業取得に際し、ご協力いただいた職場スタッフの方々にはこの場を借りてお礼申し上げます。

支出が増えやすい出生後に育児休業を取得することは、確かに一時的に収入が減り、生活・家計が圧迫される側面もあり、育児休業制度を利用しない理由として理解できます。しかし、私個人としては、男性が育児休業を取得することはそれ以上にメリットがあると実体験から感じました。男性の育児休業取得率が今後も増加し、男女共に育児に前向きな社会となっていくことを願います。

# 地域包括ケアシステムって何ですか？

## 伊勢崎地区の地域包括ケアシステムの取り組み

特別養護老人ホーム 小泉の杜 井上恵美子

伊勢崎市は、人口 21 万人、高齢化率 25.1%の市です。日常生活圏域は、9 つに分かれております。このうちひとつは市役所内に圏域をもち基幹的な役割をもち、8 つの地域包括支援センター（高齢者相談センター）が設置されております。

伊勢崎地域リハビリテーション広域支援センターは、市内 9 つの病院（診療所）が協力する体制をとっており、リハ専門職種が働く病院のほとんどが当センターの活動に参画していただいております。

当センターの運営上の特徴は、事業ごとに担当協力病院を設け、役割分担を設けている点です。各事業については、主幹となる担当協力病院が、他の協力病院に動員してもらう体制をとっております。ネットワークづくりとしては、情報共有・相談は、メーリングストの活用と、協力病院間でセンター会議を実施しております。この体制は、コロナ前に整っていたこともあり、コロナ中も感染対策により自粛していた事業以外は、一部ではありましたが、DVD 作成やオンラインを活用するなどサービスの形態を変更するなどの対応ができました。

センターの活動は、以前はセンター事業である医療・介護の実施指導や研修会などの啓発・普及が中心でした。現在は、これに加え、包括支援センターと連携している事業は、介護予防サポーターやフレイル予防サポーター養成講座、介護予防フェスタなどの普及啓発事業、自立支援型ケア会議、家族介護教室と、地域で開催される通いの場へ派遣を行う地域リハ活動支援事業がなどの事業が中心となっております。その中でもいくつか具体的な活動を紹介させていただきます。伊勢崎市は、介護予防サポーター、フレイル予防サポーターにそれぞれ別々の役割を期待しております。このため、各サポーターなどの担い手の充実が、課題となっております。地域リハ活動支援事業は、通いの場への派遣後 6 カ月経過すると、再依頼できることから、最近では複数回派遣依頼されることが増加しております。住民の介護予防に関する活動に対して継続的な見守りの立場に変わらないかなどと課題が変化しております。自立支援型ケア会議では、地域の課題を捻出するという目的だけでなく、会議後のセンター内での情報共有などが可能かどうか、その中でリハ専門職側にも、入院時のリハ指導や、在宅でのリハサービスの在り方などへの課題の捻出をすることができるのかなど話題になってきております。伊勢崎市の助け合いのしくみづくりにどの程度までセンターが関わっているのか今後の課題となりそうです。

# \*\*\*\*\*書籍紹介\*\*\*\*\*



## 「循環とは何か？ 虜になる循環の生理学」

日高病院 徳竹 大樹

著者：中村謙介  
出版：三輪書店  
価格：4600 円＋税



はじめまして。書籍紹介をさせていただく前に私の経歴をお話しさせていただきます。私は長野県出身で大学進学を機に群馬県へ来ました。その後新卒で当院系列病院の回復期病棟にて2年間勤務し、現在は急性期病棟に異動し4年目となります。

本書籍と出会ったのは回復期病棟から急性期病棟へ異動した時で、重症度の高い患者様を担当させていただく機会も増え、病期の違いに悩むことも多い状態でした、特に循環器疾患の患者様を担当させていただく際には「循環が悪いってことは何が問題なの？」、「リスク管理として何を注意するべきか？」など、自分の知識不足、さらに技術が不足しているために、どのような介入や関わりを行って良いのか悩むことがありました。

今回ご紹介させていただく書籍は循環の生理学、特に酸素運搬と組織還流という2点にフォーカスを当て、運動時の生理学的変化や、リスク管理を流体力学や薬学なども合わせわかりやすく説明されています。私自身も介入時の運動負荷や、リスク管理において参考にさせていただいています。

以前の私は循環器というワードから「心臓」を中心に考えがちでした。特に介入において循環管理といえば、「心負荷」と短絡的な思考で、運動負荷では筋力練習の回数や肢位など大まかに考えていて行き詰まることがありました。この本には各臓器の循環を血流量を元に考察されている部分や、運動時の血液循環量変化や、血液の粘調度による血管負荷などを説明されている部分もあり多角的な視点が得られました。また常にそれらを考えることで介入によって全身状態がどのように変化したかを感覚的ではなく、論理的に多方面から理解することが段々とでき、実際に患者様の状態も改善する経験を得ることができました。その中で基本である生理学の重要性を改めて実感しています。

その他にも書ききれないくらいに、この書籍には循環をわかりやすく楽しく理解するための視点が記載されています。私の場合は急性期患者様に対して介入させていただく機会が多いですが、循環は人間の生命活動には欠かすことできない重要な要素で、病期は異なっても回復期患者様や、生活期患者様にもあてはまる部分もあるのではないかと思います。ご興味がある先生方は是非お手に取ってみてください。

# 後輩理学療法士へ

沼田脳神経外科循環器科病院

武田 廉



「おじいちゃん、早くおうちに帰ってきてね」

「お母さん、リハビリの人の言うことをよく聞いて頑張るんだよ」

毎日のようにリハビリ室や病室で飛び交っていた、当たり前だと思っていた会話や光景が、2020年から当たり前ではなくなりました。

誰にも予想できなかった未知のウイルスによって、患者様とご家族、そしてセラピストの心の支えを繋いでいた糸が切れたように記憶しています。

私は2017年に理学療法士の国家試験に合格し、同年4月に現病院に入職しました。

学生時代の私はとても優秀とは言える成績ではなく、定期試験の度に追試やレポートの再提出が当たり前でした。そんな私が、初めて患者様に触れた実習で、私の「理学療法士観」が一変しました。

「この人がどのような人生を歩んできたか、若い頃にどんな仕事をしていたか。家族関係はどうか、どんなものが好きで趣味は何か。理学療法士はそこまで理解して、関わるべきだと思う。」指導に当たって下さった現職場の理学療法士の先輩が伝えてくださった言葉は、今でもずっと私の指針になっています。理学療法士を目指す理由が曖昧であった私が、「理学療法士になりたい」と強く思った経験でした。

今、目の前に患者様として関わっている人は、誰かに愛されて育った人であり、今誰かにとって大切な存在であること。

毎日のように病院や医療施設で従事していると、多くの患者様に関わるのが当たり前になってしまいます。しかし、今私が関わる事ができている目の前の患者様との時間は、その人を大切に思うご家族や知人たちが叶わない瞬間です。

少しでも顔が見たい、直接会話がしたい、それが叶わない人たちがいる反面、私たちはその人たちに代わって患者様と直接関わる事ができる仕事に従事していることを忘れずにいたいと思います。

「今、自分がやっているリハビリを、ご家族やキーパーソンの方が見て、この人に担当してもらえて良かったと思っていただけるだろうか。」至極シンプルなこの問いが、医療従事者の資質を問うクエスションであると信じています。そこに必要なのは治療技術や知識よりも、「患者様」に真摯に向き合い、良くしたいという姿勢や想いが伝わるのだと思います。これからの理学療法業界を担っていく皆様には、患者様に向き合う姿勢を大切に頂き、一人でも多くの患者様、ご家族を救うことができる人材になって欲しいと思います。

このような機会をいただいたことに深く感謝申し上げますとともに、私自身も初心を忘れずに明日以降も目の前の患者様に最善を尽くしていきたいと思っています。

# スポーツ推進部より

## 「第2回 神奈川県理学療法士会

## 湘南西部ブロック研修会」に参加しました！

リハビリテーション専門職が地域で求められる役割



Verein (地域コミュニティクラブ)  
全国約60万クラブ  
スポーツ・文化や教育、芸術など  
地域スポーツクラブは約9万  
Verein所属会員数：約2400万人  
(ドイツの総人口約8300万人：約29%)



「第2回 神奈川県理学療法士会 湘南西部ブロック研修会」のご案内

以下の通り、研修会を開催します。参加を希望される方は、会場までご連絡ください。

名	第2回 神奈川県理学療法士会 湘南西部ブロック研修会
テーマ	「パラスポーツの身近なスポーツ化」を考える
内容	TOKYO2020大会が開催されてから1年半が経過しました。パラスポーツがTVや雑誌などのメディアで取り上げられることも増え、以前に比べて情報が目に入るようになってきたと考えられます。ただ、実際に体験したり、プレーを目的で観たり、複数回体験したことのある人はまだ少ないのが現状ではないでしょうか。障がいのある方にも関わりやすく、スポーツの活動のチャンスは平等であるべきです。パラスポーツがもっと身近なスポーツになるには、どうしたらいいのでしょうか。本研修会では、まず湘南西部エリアのパラスポーツの現状をお伝えした後、様々な立場で活動される講師の皆さんからシェアリングいただきます。質疑応答のコーナーで、全国的にどこも同じではない点もあろうと推察されている方も、体験の機会を捉えている方も、何となく興味があるというくらいの方も、一緒に「パラスポーツの身近なスポーツ化」について考えてみましょう。
情報提供	高崎健康福祉大学健康福祉学部 理学療法学科 PT 中川 和昌 氏 (日本理学療法士協会や群馬県理学療法士協会、海外の経験に関する情報提供も) 介護老人保健施設めぐみの里 リハビリテーション課 OT 菅野 裕太 氏 (WEST SHONAN SC という車いすバスケチームに所属する情報提供) りんどうリハビリ看護ステーション PT 池上 直宏 氏 (大磯パラスポーツを楽しむおにぎりに関する情報提供) ファンメディケーション株式会社 代表取締役 森本 滋久 氏 (「セルフメディケーションを通して続ける地域づくり」の立場から) 介護老人保健施設めぐみの里 リハビリテーション課 PT 安藤 岳彦 氏
日 時	2023年2月17日(金) 18:30~20:00 ※17:00~18:30で接続テストが可能
場 所	オンライン (Zoom) 形式 ※IDとパスワードは後日、ご連絡します
参加費	無料
注 意	(公社) 神奈川県理学療法士会 湘南西部ブロック

スポーツ推進部の中川和昌(高崎健康福祉大学)です。標記研修会が2023年2月17日(金)の18:30~20:00の日時でオンラインにて開催され、私も講師の一人として参加してまいりました。テーマは、「パラスポーツの身近なスポーツ化」を考える、で開催され、私以外の群馬県理学療法士協会からも参加者が1名、その他多様な参加者が募り有意義な意見交換を実施できました。

本ブロックの研修会は、介護老人保健施設ひまわりの里リハビリテーション課の理学療法士である安藤岳彦先生が中心となって活動しており、当日は安藤先生より湘南西部エリアのパラスポーツの現状の説明がされ、私のほうから自身の経験を基に国際的な情報を中心に情報共有させて頂きました。その後、作業療法士の吉田祐太先生がWEST SHONAN SCという車いすバスケチームの運営に関する情報、りんどう看護ステーション理学療法士の池上直宏先生が大磯パラスポーツを楽しむ会の運営に関する情報、ファンメディケーション株式会社代表取締役の森本滋久様が「セルフメディケーションを楽しく続ける地域づくり」に関して情報共有して頂きました。各々様々な立場から、違った視点からの発表であり非常に参考になりました。立場や活動内容は違いますが、共通しているのはパラスポーツを盛り上げよう、という想いであり、参加者一同その熱い想いを共有しながらディスカッションできたのは良かったです。

東京パラリンピックを境にパラスポーツの情報は入ってくるようになったと感じていますが、そのレガシーとして定着するにはまだまだ課題は多いと思います。多様化が叫ばれている昨今、本研修会のテーマでもあった、「パラスポーツの身近なスポーツ化」は一つの重要なキーワードかと思えます。パラスポーツという環境下での理学療法士としての関わりに縛られずに、まずは社会・スポーツという枠の中にパラスポーツと我々個人をおいてみる、さらにはその中で一緒に楽しんで活動してみる、そこから理学療法士としてのサポート内容を考えるということが重要なのではないのでしょうか。

群馬県内のパラスポーツ、理学療法士協会としての関わりはまだまだ可能性に溢れています。神奈川県に活動に刺激を受けながら、スポーツ推進部は部員の皆さんと一緒に、県内のパラスポーツを盛り上げるための活動を今後も企画していきたいと思えます。ぜひ興味をもって参加してみてください。



## 第1回スポーツ推進部交流会（東毛・中毛ブロック）開催

令和5年6月10日、太田医療専門学校にて第1回スポーツ推進部交流会が開催されました。今回は第1回の交流会で顔合わせを行う意味も兼ねて参加された7施設（慶友整形外科病院・石井病院・伊勢崎スポーツ整形外科病院・堀江病院・東前橋整形外科病院・群馬スポーツ整形外科・もとじま整形外科）の紹介の後、2グループに分かれて個々での自己紹介と自身が気になる事の話し合いが行われました。私が参加させて頂いたグループではスポーツイベントを開催しその場で評価・自主トレーニングのプログラムを紹介するイベントについての話題が挙がり、もっとたくさん回数を行うにはどうしたらよいか・スポーツを通じて地域を盛り上げていきたいといった話合いや、勉強会の参加についても多く語られており、参加する為に業務を負担してくださっている先生方への配慮や参加に協力して下さった施設へどのように還元していくべきかの話が熱心になされておりました。私自身はスポーツ障害に対しての理学療法を提供する機会が少なかったため先生方の活発な話し合いに触れ良い刺激を受ける交流会に参加させて頂きました。

## 第37回臨床講習会 開催

令和5年7月2日、群馬大学にて第37回臨床講習会が開催されました。演目は脆弱性骨折の再発予防と理学療法で川崎医療福祉大学の松本浩美先生が講師をされていました。骨脆弱性骨折は臨床で非常に多く関わる疾患であり、理学療法での治療はもちろん重要であるが再発の予防の重要性に特に力を入れて教えて頂いた印象がありました。私が骨粗鬆症は男性で1%、女性で18%の診断率であるが骨粗鬆症の検診受診率は僅か6%に過ぎない事に驚きました。講義では骨粗鬆症への意識を高める為の様々な活動内容が紹介され無関心層への介入が重要であることを学びました。また骨粗鬆症を他職種間のチームで取り組むリエゾンサービスについても教えて頂き、診療報酬にもなっているため理学療法士の活躍のチャンスであることも知りとても有意義な講義となりました。

## 北毛ブロック新卒歓迎交流会 開催

令和5年7月11日（火）、沼田市のテラス沼田にて第17回北毛ブロック新卒歓迎交流会が開催されました。会場参加とオンライン参加のハイブリット方式での開催となりましたが、合わせて33名の方が参加されました。はじめに、渡辺真樹会長から「理学療法士を取り巻く現状」というテーマで自己研鑽の大切さと組織力の重要性などをご講演して頂きました。その後、「患者診療における感染症対策の基本」というテーマで関口病院の高橋 智之先生と西吾妻福祉病院の湯本 脩介先生に基本的な感染対策の再確認とコロナ禍での各病院の感染防止対策についてご講演して頂きました。病院によってシステムが異なる中で各病院の特色が聞けて大変勉強になりました。最後に新卒の方に自施設の紹介をして頂きました。新卒の方は自分の施設以外の情報を聞く機会はなかなかないと思うので、ご自分の働いている地域にどんな病院・施設があるのか知る良いきっかけになったのではないかと思います。



## 東毛ブロック新卒歓迎交流会 開催

令和5年7月14日に東毛ブロック新卒歓迎交流会・勉強会がzoomで開催されました。

第一部では群馬県理学療法士協会 渡辺真樹会長より、ご挨拶、柴ひとみ先生より群馬県理学療法士協会の説明をしていただきました。そして、「新人PTがつまずきやすいポイントを一挙解説」をテーマに勉強会が開催されました。

第2部では2グループに分かれ、新卒歓迎交流会が開かれました。新人さんからの質問では「目標設定はどのようにしているのか」、「勉強方法のやり方」等、質問がいくつかでており、一人一人の先生よりご自身の経験や知識等を話されていました。新人さんとしては職場の先輩とはまた違った意見が聞けて勉強になったのではないのでしょうか。

自分自身も他病院の先生の意見や考え等が聞ける場がなかなかないので、臨床で活かせるような意見も多く、学びになりました。  
(わかば病院 関口 伊代)

## 西毛ブロック新卒歓迎交流会 開催

令和5年7月19日に西毛ブロック新卒歓迎交流会がピエント高崎で開催されました。

始めに群馬県理学療法士協会 渡辺真樹会長より、ご挨拶・現在の理学療法士協会の現状等をご説明して頂きました。そして講演第1部では「リハビリ先端機器について」をテーマに勉強会が開催されました。

講演第2部では「多職種連携について」をテーマに勉強会が開かれ、4-5人のグループに分かれ途中でグループディスカッションを挟みながら行われました。ここ数年、コロナ渦でzoom等での研修や交流会が多く開かれていましたが、久しぶりの現地開催となり、新人さんからの発言も多く聞くことができ、有意義な交流会となりました。  
(わかば病院 関口 伊代)



## 中毛ブロック新卒歓迎交流会 開催

令和5年7月21日、オンラインにて中毛ブロック 新卒歓迎交流会開催されました。まず、群馬県理学療法士協会 渡辺真樹会長より「理学療法を取り巻く現状について」ご講義いただきました。講義の中で、職域の拡大が今後さらに重要となり、切磋琢磨し全体の質の底上げが重要であるとのお話があり、「時間がないこと」や「お金がないこと」への対策、組織力の重要性などについてご講義いた



だきました。必要とされる人材となるために、受け身になるのではなく、群馬県理学療法士協会提供されているコンテンツを、自ら進んで生涯学習に活かしていかなければと改めて感じました。

続いて群馬県理学療法士協会 柴ひとみ理事より、群馬県理学療法士協会の各部局の組織図や役割について、分かりやすく解説していただきました。また、中毛ブロック長 荒木海人先生より中毛ブロックの活動を紹介していただき、新卒歓迎交流会や施設間連絡会の内容についてご紹介していただきました。

研修会の後半では、計7施設より新卒の方よりスライドによる病院紹介が行われました。自己紹介や抱負、自施設の特徴について、緊張しながらも一生懸命発表されており、初々しさを感じました。  
(わかば病院 石関 直忠)

## 2023年度介護予防推進リーダー導入研修会 開催

令和5年7月30日、zoomにて開催された介護予防推進リーダー研修会に参加させていただきました。研修では介護予防事業の現状と今後の課題・PTに課される役割についての話から始まり、次に広域支援センターの紹介や実際のアプローチ方法・注意点など具体的な説明がありました。最後にグループワークとして実際に介護予防事業の企画提案を討論し発表する流れとなりました。

私が強く感じた事は定期的に運動を行うよりも趣味やボランティアによる活動を行ったほうがフレイルとなるリスクは低いという事でした。グループワークでの発表も3チームすべて野菜作りやカラオケ・ショッピングモールでの買い物と行った趣味活動を促すものでした。セラピストが個別介入するプログラムは確かに高い効果がありますが終了後なかなか継続しないという問題点もあるのでいかにして趣味や地域活動での継続につなげていくかが介護予防事業では大切であると学びました。

## 会員動向

令和5年7月26日現在

会員数 2154 名、休会 293 名、施設数 371 施設

## ニュース收受

2023/5/23	群馬県作業療法士会ニュース「からっ風」第 152 号	群馬県作業療法士会
2023/5/26	第 26 回静岡県理学療法学会学術大会誌	静岡県理学療法士会
2023/5/29	群馬県医師会報 No.898 2023 May.	群馬県医師会
2023/5/29	理学療法湖都 第 42 号	滋賀県理学療法士会
2023/6/6	ゆきわり草 No.203	新潟県理学療法士会
2023/6/20	第 21 回群馬県臨床工学技士会学術大会抄録集	群馬県臨床工学技士会
2023/6/22	四国理学療法士会創立 50 周年記念誌	四国理学療法士会
2023/6/28	群馬県医師会報	群馬県医師会
2023/6/28	JPTANEWS Vol.343	日本理学療法士協会
2023/7/4	大阪府理学療法士会ニュース第 298 号	大阪府理学療法士会
2023/7/4	総合理学療法学 第 3 巻	大阪府理学療法士会
2023/7/11	「かくどけい」第 142 号	熊本県理学療法士協会
2023/7/18	神奈川県理学療法士会ニュース No.296	神奈川県理学療法士会
2023/7/18	広島県理学療法士会 No.274 One step	広島県理学療法士会
2023/7/19	理学療法いばらき 第 27 巻	茨城県理学療法士会
2023/7/20	ケアマネ群馬 No130	群馬県介護支援専門員協会
2023/7/24	秋田県理学療法士会ニュース第 209 号	秋田県理学療法士会
2023/7/28	群馬県医師会報 No.900 2023Jul.	群馬県医師会
2023/7/31	和歌山県理学療法士協会ニュース No.99	和歌山県理学療法士協会
2023/8/1	愛知県理学療法士会ニュース APTA News 210	愛知県理学療法士会
2023/8/1	兵庫県理学療法士会ニュース Vol.200	兵庫県理学療法士会

### \*\*\* 編集後記 \*\*\*

今回初めて編集をさせて頂き、色々と気付かされたことが沢山ありました。以前の私は研修等に積極的に参加するタイプではなかったのですが、取材を兼ねて参加させて頂く事で沢山の知識を得ることが出来ました。また、県内で沢山の先生方が理学療法の発展のため尽力されている事に気が付きました。これを機会に取材以外でも活動に参加し、知識を深めて行こうと思います。

最後になりますが今回源流編集にあたり、原稿の執筆を快く引き受けていただいた先生方、また研修記などご協力いただいた先生方には心より感謝申し上げます。

青木桂二